



Title	会話文におけるト書きとその文体に関する調査報告
Author(s)	浜田, 泰彦
Citation	語文. 2008, 91, p. 50-59
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69118
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

会話文におけるト書きとその文体に関する調査報告

浜 田 泰 彦

一、調査の目的および方法

本稿では、発話箇所の下限を直示する目安の一つとなる、引用の格助詞「と」と、それに続く文体のあり方を、中古から近代までの文学作品を調査対象とすることにより、その通時的変遷や作品ジャンルに規定されることでの文体の特性について報告する。

なお、今回の調査のきっかけとなり、よりどころとしたのは、

濱田啓介氏「文体論試論―ト書きの周辺」(第二四四回近代語研究会春期発表会、於・関西大学、二〇〇七年五月二十五日。未公開)という御報告である。氏は、中世軍記(『曾我物語』・『太平記』・『義経記』)、近世軍記(『前太平記』・『太閤真蹟記』・『絵本太閤記』)、浮世草子(西鶴『好色五人女』、其磧『けいせい色三味線』・『世間娘気質』、南嶺『武遊双級巴』)、其笑『花楓劔本地』、読本(京伝『優曇華物語』・『桜姫全伝曙草紙』、馬琴『月水奇縁』・『椿説弓張月』・『南総里見八犬伝』)、説経・浄瑠璃(『さん

せう太夫』・『傾城反魂香』・『冥途の飛脚』)、歌舞伎(『仮名手本忠臣蔵』・『けいせい浅間獄』・『名歌徳三舛玉垣』(台帳)、滑稽本(一九『東海道中膝栗毛』・三馬『浮世風呂』)以上六ジャンル二十三作品を調査対象とし、格助詞「と」を含む文章の用例収集から、その文体を九つの特性に分類された。

- (一) 言表動詞直続と非直続
- (二) 「けり」着用と非着用
- (三) 「て」と「ば」
- (四) 「つつ」後続
- (五) 言表居体言への連承
- (六) 「と」に続く話者主語表示
- (七) 「と」に行為が直続する叙法
- (八) 所謂「ト書き」
- (九) 「ト書き系文芸」の成立²⁾

読本・浮世草子を多く調査対象とされていることからもうかがえるように、濱田氏の御報告は、近世読本の文体様式を探索するという問題意識によって開始されたものであり、また、先掲のごとく中世・近世の軍記、説経・浄瑠璃等いわゆる「語り物」に属する文学における文体形成に関与する諸作品を調査対象としておられる。しかし、一方でその「語り物」の文体も何らかの準拠すべき文体があるのではないか、とも考えられる。そこで、今回の我々の調査では、中古・中世の物語作品を対象に加え、さらに近代以降に至ってどのように変遷していくかを確認すべく、次に掲げる合計十八の作品を考察対象とした。

号	書名	調査範囲	テキスト
イ	竹取物語	全巻	『新編日本古典文学全集12』
ロ	源氏物語	桐壺〜藤裏葉	『新編日本古典文学全集20』 22』
ハ	落窪物語	全巻	『新日本古典文学大系18』
ニ	とりかへばや物語	巻三〜四	『新日本古典文学大系26』
ホ	承久記	全巻	『新日本古典文学大系43』
ヘ	舞の本	十一曲 ⁽³⁾	『新日本古典文学大系59』
ト	武家義理物語(西鶴)	全巻	『新編日本古典文学全集69』
チ	繁野話(庭鐘)	全巻	『新日本古典文学大系80』
リ	若太平記白石噺 第一〜第三		『新編日本古典文学全集77』
又	牛店安愚楽鍋(魯文)	全巻	『名著複製全集近代文学館』

ル	人間万事金世中 (黙阿弥)	全幕	『新日本古典文学大系明治編8』
ヲ	浮雲(四迷)	全冊	『現代日本文学全集』
ワ	埋木(鷗外)	全冊	『鷗外全集第一巻』
カ	五重塔(露伴)	全冊	『明治文学全集幸田露伴集』
ヨ	たけくらべ(一葉)	全冊	『樋口一葉全集第一巻』
タ	蒲団(花袋)	全冊	『明治の文学第23巻』
レ	すみだ川(荷風)	全冊	『明治文学全集永井荷風集』
ソ	或る女(武郎)	全冊	『現代日本文学全集9』

調査にあたり、日本文学国語学専修の大学院生有志が、右諸作品を分担して、作業を進めた。調査員は、心中思惟・故事成句等の引用・詠歌などを除き、作中で実際に口に出して発言された発話内容の下限を示す「と」を含む文章例のみを抽出し、該当する類型番号を指定した上で、データを作成した。

その九つの分類番号の内(八)は、「と」の直後に下座音楽や効果音等演出を指示する歌舞伎脚本に典型的に見られる文体である。さらに(九)は、対話本文に登場人物の行為等をト書きで、二行割書表示される洒落本に典型例を見る文体である⁽⁴⁾。この二形態について、本調査では、前者の例を河竹黙阿弥『人間万事金世中』(ル)に、後者を仮名垣魯文『安愚楽鍋』にそれぞれ、明治以降への継統を確認するにとどまった。よって、本稿では、濱田氏の驥尾に付しつつ、(一)〜(七)の分類に準拠し、より通時

的範囲を拡大して、調査報告を行うものとする。

以下、順を追って調査報告を行うが、本論展開の便宜上、七つの分類各項目で濱田氏の概説を並記する形をとらせて頂くことを諒とされたい。

二、調査報告

(一) 言表動詞直統と非直統

濱田氏は、「…と言ひて」・「…とのたまふ」等、言表動詞直統型が中世軍記の原則である、との結果報告をなさっているが、本調査において『竹取物語』(イ)以下、古典作品では、全て直統型が多数を占める。

言表動詞直統指数

イロハニホヘトチリヌルヲワカヨタレン
75.0
49.1
60.0
56.3
49.5
39.8
33.5
39.7
68.5
47.1
01.0
37.8
43.4
24.6
15.7
24.1
29.0
44.2

言表動詞非直統指数

イロハニホヘトチリヌルヲワカヨタレン
03.0
11.6
03.9
09.4
05.4
07.0
16.5
08.5
02.4
02.0
03.3
10.5
22.8
17.4
14.4
27.8
10.0
27.6

*「イソソ」は、作品記号(先掲)を示す。指数は、格助詞「と」

に導かれる会話文の総計を分母、該当する現象数を分子とし、小数点第一位以下四捨五入で表示(単位は%)。「000」は用例数僅少のもの。「1」は用例ゼロ。以下、同様。

指数表からは作品記号『武家義理物語』(ト)で、直統型と非直統型が二対一程度の比率となっているが、

〈1〉小膳騒ぐ風情なく、「これは入り組みし子細あり」と、始めの段々語れば、(巻五)

例文〈1〉のように、文飾を好む西鶴作品の傾向の一つと言えるだろう。

言表動詞の前に修飾語句を配置する形式は、『五重塔』(カ)より『蒲団』(タ)まで明治二十〜四十年代の小説作品に至って増加し、直統型と拮抗するようになっている。

〈2〉「喉自慢、腕自慢、あれ彼の声を此町には聞かせぬが憎し」と筆やの女房舌うちして言へば、(「たけくらべ」)

〈3〉「いゝえ、私も召上るんですもの」と芳子は快活に言った。(『蒲団』)

しかも、この二例のように、「発話 + 発話主語表示 + 言表動詞」という分類番号(六)にも該当する形式の文章が非直統の典型となっている。これは、「Aがく言う」の形の文章が平板に連続するのを避けた結果でもあろう。

加えて、直統型で注目しておくべき現象として、発話上限と下

限の両方に言表動詞が配置される文体があることである。『竹取物語』(イ)では全用例数の四分の一強を占める(二十五・二%)四十三例が抽出される。

〈4〉翁、いでて、いはく、「かたじけなく、(…)きはまりたるかしこまり」と申す。『竹取物語』

〈5〉翁、かぐや姫にいふやう、「我が子の仏変化の人ともうしながら、(…)聞きたまひてむや」といへば、『竹取物語』

この現象は、『繁野話』(チ)に至るまで、連続と見ることができ。中でも、『承久記』(ホ)では、全二十三例の内一例を除いて、二十二例が次の例文〈6〉のごとく、前後の言表動詞が一致するという興味深い現象を得ることができた。

〈6〉藤四郎入道申ケルハ、「口今、(…)給り候ハン」ト申ケレ共、『承久記』

『竹取物語』(イ)では、前後一致するものではないものが例文〈4〉・〈5〉のように相半ばしたが、『承久記』(ホ)ではほとんど前後一致し、しかも次の分類番号(二)とも関連して、助動詞「けり」の着用まで一致していることも注目される。

(二)「けり」着用と非着用

濱田氏は、言表動詞に「けり」が着用するのは中世的文体であり、終止形も多いが、一層「ければ」の頻度が高い、と報告されている。

「けり」着用指数

イロハニホヘトチリヌルヲワカヨタレン	
05.5	
01.5	
02.4	
01.8	
46.7	
27.0	
11.2	
05.1	
03.1	
02.0	
-	000
-	-
-	03.2
-	-

本調査では、「けり」着用がみとめられる文章例のみを採取した。指数表からは濱田氏の指摘通り、中世軍記の一である『承久記』(ホ)の四十六・七%をピークとして、軍記ものに材をとった舞の本(ヘ)および、『武家義理物語』(ト)にそれが継承されている、という結果を見た。

『承久記』における「けり」の着用は、「ければ」が全着用数(一四七例)の内、五十四・四%(八〇例)と最も多く、連体形「ける」が三十二・七%(四八例)で、それに次いで高い頻度を示した。分類番号(三)に関連することであるが、発話文を受ける助詞「ば」は、発話者の後件に引き継ぐ役割を有し、右の結果より「けり」着用では、過半がその役割を帯びることになる。

(三)「て」と「ば」

発話文において、「て」は言表者の発話と同時ないし、それに続く行為に付帯する接助詞として、「ば」は言表者外の人物に後件をつなぐ接助詞として、ストーリーを展開させるために大きな

役割を担う。

たとえば『落窪物語』(ハ)では、

〈7〉帯刀心得て、(…)心あはたしくして、「たゞいま対面す」といでいぬれば、あきおまへにまいりぬ。(巻二)

〈8〉(典薬助は)「くすし成り。(…)あい頼み給へ」とて、

胸かい探りて手触るれば、女おどろくしう泣きままとふといせいすべきすべき人もなし。(巻二)

と、「…してすれば」で言表者甲から言表者外乙に展開を移譲するケースが五十五例(全体の五・二%)を数える。

「て」ないし「ば」着用指数

イ	53.6
ロ	50.8
ハ	74.8
ニ	88.3
ホ	75.6
ヘ	51.6
ト	44.2
チ	33.3
リ	28.5
ヌ	13.7
ル	13.7
ヲ	43.0
ワ	21.3
カ	34.3
コ	56.2
ケ	27.8
セ	29.0
シ	26.5

指数表からは、役者の動きによって頻繁に視点変化を強いる『基太平記白石断』(リ)・『人間万事金世中』(ル)および、登場人物の行為を二行割書で示す洒落本の形態を踏襲した『安愚楽鍋』(ヌ)では減少していることが分かる。

ところで、格助詞「とて」には「思ふ」・「言ふ」等の動詞連用形を補いいうるといふ通説があるが、今回の調査では、何らかの命令を発話主体者が下した直後に、被命令者が応じる主体変化のパターンとして、

〈9〉(大宮は)「昔にならひ(…)なほやつれさせ給へ」とて、いみじくしつくし給へるものども、又重ねて奉れ給へり。

〔源氏〕葵

〈10〉駿河守、(…)権大夫ノ許へ持向へ、「已ニ(…)御覧候へ」トテ、権大夫義時、折節、諸人対面ノ前ニ引ヒロゲテ

差置タリ。(『承久記』)

この二例のような文章が、舞の本(ハ)まで少数ながら、断続的に見ることが出来る。

(三)は、「ば」が主体変化の分岐点を示すような文体の例であるが、「と」がその境界をなすようなケースも舞の本(ハ)に二例、『武家義理物語』(ト)に三例と僅少なが見られる。

〈11〉竹島覚悟して、「これ武運の尽き。(…)相手取るまでおなし」と、(滝津氏は一注、浜田。)自書を先づ差し止め、

〔武家義理物語〕巻三)

〈12〉(お勢は)「アノー結婚して仕舞へつて」と、聞くと等しく文三は、(『浮雲』)

例文〈12〉中にあるように、この文体では、聞き手が文字通り「聞く」ことにより、主体変化が齎される。じじつ、『浮雲』(ヲ)の八例の内四例がこのケースである。

敬もこよなし。〔『源氏』朝顔〕

のごとき文章は、『竹取物語』(イ)より通時的に例文(19)のように散見される。¹⁰⁾

〈19〉(お勢は)「さう、オホ、」と無理に押出したやうな笑い声、何となく冷淡い。〔『浮雲』〕

加えて、発話文に存在動詞「あり」を後続させる文章も、数は少ないながら、近代まで通時的に確認することができた。

〈20〉(女君は)「御返、早聞こえ給へ」とあれど、いらへもし給はず。〔『落窪物語』巻四〕

〈21〉(按察卿は)「汝思へカシ、(…)存知ノ旨ニ任セテ申ト有ケレバ、〔『承久記』〕

〈22〉(三五郎は)「夫れならば(…)正太さん、番をたのむ」とあるに、〔『たけくらべ』〕

例文(22)の古典文法を採用した『たけくらべ』では五例を有する。先述の形容後続と存在化はともに、発話内容を客観的にし、語り手を前置化する修辞でもあり、

〈23〉「よくもあなたはそんなに平気でいらっしやるのね」と力を籠めるつもりで云ったその声は、いくぢもなく、〔『或る女』〕

右のような三人称作品にも継承されていくこととなる。

(六)「と」に続く話者主語表示

濱田氏によれば、この文体は軍記での形式的用法であり、西

鶴・其磧・馬琴にも継承された、と概説される。本調査では、『竹取物語』(イ)から、初期読本『繁夜話』(チ)まで、断続的に低い頻度で推移していることを確認した。

「と」に続く話者主語表示指数

イ	0.0
ロ	0.2
ハ	0.4
ニ	0.2
ホ	0.5
ヘ	0.6
ト	0.0
チ	0.2
リ	0.2
ヌ	0.8
ル	14.6
レ	10.8
ロ	26.9
ハ	12.5
ニ	23.5
ホ	16.3
ヘ	55.6
ト	41.9
チ	18.6

一方、歌舞伎作品『碁太平記白石噺』(リ)および『人間万事金世中』(ル)では、十パーセント前後の指数に増加している。これは次のごとく、

〈24〉笑顔に恋の糸口も、頭れさうな折からに。「申し、

松兵衛様。若君様が召します」と、奴の伊達助出で来たり。

〔『碁太平記白石噺』第二〕

〈25〉とつくりと相談しませう。ト勢左衛門件の札を持ち、

〔『人間万事金世中』序幕〕

発話者の行為を特に指定しておく必要性から生じた増加であると考えられる。

明治二十年代以降の小説作品では、古典文・現代文の採用選択にかかわらず、指数表から増加がうかがえるが、これは古典作品と単純に比較できる傾向ではなく、「Aが言う」か「○○とAが言う」のいずれかで、話者表示を行わなければならないことから

生じた現象といえようか。たとえば、『蒲団』(夕)では話者主語後続表示が全体の過半を超える割合であらわれている。

〈26〉「だって余り(…)困るね」と時雄は笑った。

一方で、同じ時雄を主語に採る場合でも、

〈27〉時雄は振り返って、「それで、何うしたの?」と突如として訊ねた。

という例を見ることも同時にできるのであり、作者田山花袋が、単調な文体にならぬよう配置を工夫したのでだろう。

(七)「と」に行為が直統・非連続する叙法

濱田氏の調査では、直統のみを対象になさっているが、本調査では非連続の場合も考慮に加えた。

行為動詞継続指数

イロハニホヘトチリヌルヲワカヨタレン
16.7
34.7
29.9
30.8
37.1
37.3
36.6
44.4
60.0
47.1
62.7
39.0
48.5
38.6
54.2
29.6
51.6
21.2

言表動詞継続指数

イロハニホヘトチリヌルヲワカヨタレン
78.0
60.7
63.9
65.6
54.9
50.0
48.3
10.8
49.0
04.2
48.3
66.2
41.7
30.1
51.9
38.7
71.8

両指数表を比較し、「と」に続く動詞を言表動詞で連承させるか、それ以外の行為を選択するかという側面で検討すると、『とりかへばや物語』(二)までの物語作品では、おおむね七対三の割合で、圧倒的に言表動詞が選択される傾向にあるが、中世軍記『承久記』(ホ)に至って、両者の割合が拮抗してくると理解できる。『著太平記白石断』(リ)・『人間万事金世中』(ル)で、行為動詞への連承が圧倒的に選択されるのは、発話を前提にした特性によるものとして、かなり大づかみに捉えれば、両者の拮抗状態は近代小説にまで及び、行為動詞接続への選択が拡大したと言える。中でも『たけくらべ』(ヨ)・『すみだ川』(レ)では、行為動詞連承が言表動詞を上回るようになる。

〈28〉(長吉は)「ざまを見る(…)横町の闇に気をつける」
と三五郎を土間に投出せば、『たけくらべ』

〈29〉「だから云はなひ事つちやない。」と蘿月は軽く握り拳で膝頭をたたく。『すみだ川』

このことは、発話が鉤カッコで安定的に区画されるようになってきたために、「と」の後にわざわざ「言う」・「話す」・「語る」等の言表動詞に連承させる必然性が薄れてきた事情が作用したとも理解されるのではないだろうか。

以上、濱田氏による「ト書き」文体の分類に従って、その通時的変遷を主に指数からうかがえる情報により、報告を行ってきた。最後に「その他」として二点、これらの分類に該当しない「と」

の用法について言及し稿を閉じたく思う。

〔その他一〕同一発話主体者の発話を中断する「と」

〈30〉「いで、あな幼なや。(…)何ともおぼしたらで、雀慕ひ給ふほどよ。罪得る事ぞと常に聞ゆるを、心憂し」とて、

「こちや」と言へば、ついゐたり。(『源氏』若紫)

例文〈30〉は、尼君の発話中断の一例であるが、既に加藤雅嘉氏に指摘があるように、ここでの「と」「とて」の関係性は、単なる発話の中断を示すのではなく、複数種類の発話を並列的に書記した、など様々な理由づけができると考えられる。⁽¹⁾〈30〉の場合、前半は雀を追ひ掛ける女の童のあどけなさに対する愛憎半ばする心情吐露で、後半はその少女への呼び掛けに発話内容がきり変わっている。一々の事情は調査が及んでいないが、ともあれかような例は『源氏』(ロ)のほか『落窪』(ハ)・『とりかへばや』(ニ)・『承久記』(ホ)まで、『落窪』の三十四例(内、「と」による中断十九例、「とて」による中断十五例)をピークに減少傾向にあるが、確認することができる。⁽²⁾

〔その他二〕近代小説における「ト書き」表記

明治三十〜四十年代の小説作品における「ト書き」は、様々な表記方法が採用されている。⁽³⁾

〈31〉「まあ！」と叫びし妻は(尾崎紅葉『金色夜叉』)

〈32〉『走けて御覽なさい』

と、口の中で云つて、微笑んだ。(武者小路實篤『お目出たき人』)

〈33〉さあ此れでもか、此れでもか。」

と、二人は相變らず抓つたり擦つたり、(谷崎潤一郎

『少年』)

順に見ていくと、〈31〉紅葉は一字分の空白を設けた上で、

〈32〉実篤は発話後改行して、〈33〉谷崎は改行後一字下げで、そ

れぞれ「ト書き」に続けている。一方で、同時代の明治四十二

(一九〇九)年に出版された『源氏』翻刻文(若紫)では、

〈34〉(源氏)「かひなき心地のみ(…)いかでか」との給へば、

(女房)「いでや(…)大殿籠り入りて」など聞ゆる折しも、

彼方より来る音して、(『國民文庫 源氏物語 上巻』明治四

十二年六月・國民文庫刊行會)

のように、発話部の鉤括弧を除き、特別な配慮はとられていない。

如上のバリエーションが見られるのは、作家個人の嗜好に寄与

するところが大きいのか、あるいは各々に準拠する表記法があっ

たのか、なお今後の調査が俟たれる問題である。

おわりに、

以上、「ト書き」文体の通時的変遷と銘打ったものの、調査作品はわずか十八作品にとどまり、データ不足はいなめなかつた。

また、写本と版本ではその表記方針におのづから相違が生じるの

であり、本調査のように、両者を一括して考察対象とするには問

題がある。しかし、中古〜近代の広範囲で一貫した文体を調査する機会は、決して多くはなく、それ故の収穫も少なくなかった。本稿が発話文の形態分析への一助となれば幸甚である。

末筆ながら、今回の調査報告のきっかけを作って下さった濱田啓介氏の御学恩に感謝申し上げます。

註

- (1) 当日配布資料五枚の内、一枚目(二頁)。
- (2) (1) 配布資料一頁。
- (3) 『入鹿』、『満仲』、『硫黄が島』、『木曾願書』、『常葉問答』、『末來記』、『腰越』、『畠樞』、『清重』、『劍讃嘆』、『十番切』の十一作品。
- (4) 『月花余情』に胚胎し、『南江駅話』に成立。後期滑稽本・人情本に継承される文体である、と概説(配布資料一頁)。
- (5) 『落窪物語』(ハ)八例、『とりかへばや物語』(ニ)一例、舞の本(ハ)六例、『武家義理物語』(ト)五例、『繁野話』(チ)二十一例。
- (6) 前後動詞に一致を見るもの三十二例、不一致のもの十一例。
- (7) 濱田氏は、中世軍記では「とて」・「とくれば」、近世読本で「とくて」・「とくば」の文体が多いと概説される。
- (8) 『源氏物語』(ロ)で四十七例、『承久記』(ホ)八例、『たけくらべ』(ヨ)七例。
- (9) 糸井通浩執筆担当「とて」(『日本語文法大辞典』二〇〇一年三月・明治書院) 参照。
- (10) 『竹取物語』(イ)一例、『源氏』(ロ)十七例、『武家義理物語』(ト)三例。

(11) 加藤昌嘉「と」の気脈―平安和文における発話/地/心内の境―(『詞林』二〇〇六年十月)の内、「一」、「…」と「…」型の発話文。

(12) 『とりかへばや物語』(ニ)一例、『承久記』(ホ)一例。

(13) この項目は、鳩野恵介氏の御調査に基づく。

* 今回の調査に御協力頂いた、岩城佐和、岩田美穂、川那邊惟奈、清田朗裕、黒木邦彦、坂井二三絵、勢田道生、荘千慧、根来尚子、萩原珠実、鳩野恵介、藤本真理子、古田雄佑、松本陽子、水野亜紀子、森勇太(五十音順、敬称略)の各氏に記して感謝申し上げます。なお、データ収集・分析及び本論の文責は浜田が負った。

(はまだ・やすひこ 本学大学院博士後期課程)